

平成 23 年度
雷別地区自然再生事業モニタリング調査業務
鳥類調査
報告書

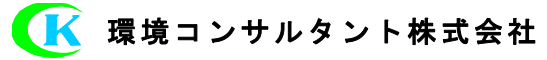
平成 24 年 1 月

北 海 道 森 林 管 理 局
環 境 コ ン サ ル タ ン ト 株 式 会 社

平成 24 年 1 月 31 日

支出負担行為担当官
北海道森林管理局長様

釧路郡釧路町中央 6 丁目 1 5 番地 2



環境コンサルタント株式会社

代表取締役 濱 口 憲 二

TEL 0154-40-2331

FAX 0154-40-3754

平成 23 年度 雷別地区自然再生事業モニタリング調査業務
鳥類調査 報告書

今回御依頼を賜りました標題の業務につきまして、別紙の通り報告書を提出いたしますので、宜しく御査収賜りますようお願い申し上げます。

なお、この度の業務の担当は下記の通りで御座いますので、御質問、お問い合わせは随時ご連絡くだされば直ちにお伺い致しますので宜しくお願い申し上げます。

記

管理技術者 鈴木 正裕

(技術士：環境部門・建設部門、環境計量士)

業務担当者 田村 康教

検 査	承 認

目 次

1. 業務概要

1.1 業務名	1
1.2 履行期間	1
1.3 目的	1
1.4 履行箇所	1
1.5 発注者	1
1.6 受注者	1
図-1 業務箇所位置図	2

2. 調査概要

2.1 調査内容	3
図-2 鳥類調査位置図	4
2.2 調査方法	5
2.3 調査地点環境概要	6

3. 調査結果

3.1 調査日時及び天候	9
3.2 確認鳥類	9
3.3 定点半径25m圏内の出現種数及び個体数	12
3.4 定点半径25m圏内における確認状況別出現種数	13
3.5 定点半径25m圏外の出現種数及び個体数	15
3.6 指定等鳥類の確認状況	16

4. 調査結果まとめ

4.1 鳥類相	18
4.2 確認状況	18

5. 考察

5.1 調査時期	19
5.2 調査方法	19

1. 業務概要

1.1 業務名

平成 23 年度 雷別地区自然再生事業モニタリング調査業務
鳥類調査

1.2 履行期間

平成 23 年 7 月 4 日～平成 24 年 1 月 31 日

1.3 目的

釧路湿原流域東端のシラルトロ沼の上流部に位置する雷別地区では、これまでトドマツの立枯等の被害が発生し、釧路湿原自然再生事業の枠組みの中で現況調査、森林再生活動が実施されており、これに伴う各種モニタリング調査が行われている。

本業務は、雷別地区自然再生事業の実施に伴い、目標林分及び森林再生事業実施箇所において、調査を実施しモニタリングの基礎データとして整理する事を目的とする。

1.4 履行箇所

北海道川上郡標茶町 根釧西部森林管理署管轄
標茶町雷別地区の国有林およびその周辺
履行箇所を図-1 業務箇所位置図に示す。

1.5 発注者

林野庁 北海道森林管理局 釧路湿原森林環境保全ふれあいセンター
宮本 元宗 所長
林 直樹 自然再生指導官

1.6 受注者

環境コンサルタント株式会社
管理技術者 鈴木 正裕
業務担当者 田村 康教



図-1 業務箇所位置図

2. 調査概要

2.1 調査内容

(1)目的

雷別地区自然再生事業の実施に伴うモニタリング調査(鳥類調査)は、森林再生に伴う自然環境の変化について、その指標種を選定し行うこととしており、これらの指標種について事業着手後の種組成を明らかにするための調査を行い、モニタリングの基礎データ整理を目的とする。

(2)実施箇所

根釧西部森林管理署管内 290 林班、293 林班

(3)実施時期及び回数

秋季 1 回：平成 23 年 10 月 11、12、13 日

冬季 1 回：平成 23 年 12 月 12、13、14 日

秋季及び冬季に各地点計 2 回実施した。

(4)調査箇所

平成 19 年度自然再生事業前モニタリング調査で設定した事業地内の人工植栽区 2 地点(⑩、⑪)、天然更新区域 2 地点(⑫、⑬)、目標とする天然林箇所 1 地点(天然林)の計 5 地点とする。

調査箇所の詳細については、図-2 鳥類調査位置図に示す。

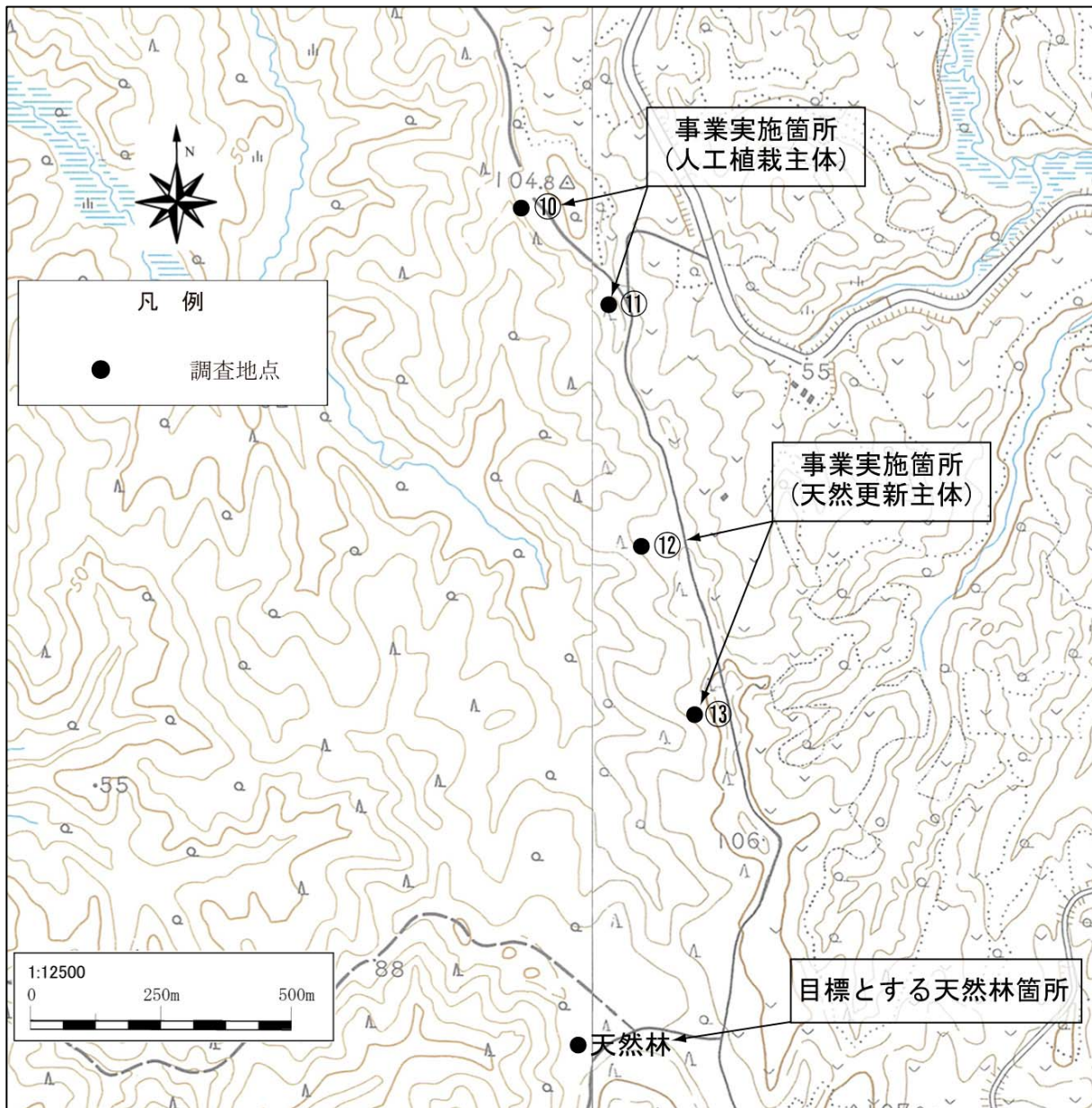


図-2 鳥類調査位置図

2. 2 調査方法

調査方法は定点観察法を用いた。調査箇所 1 地点につき 1 定点を設定し、定点の中心から半径 25m の範囲内において一定時間内(早朝の 2 時間)に出現する鳥類の種類、個体数、確認状況(飛翔移動、採餌、鳴き声の確認等の行動内容)を目撃及び鳴き声の確認から記録した。なお、海ワシ類など定点の中心から 25m の範囲を超える位置で確認した鳥類についても、種の同定ができるものについては、種、個体数、確認状況を記録した。

天然林を除く事業地 4 地点(⑩～⑬)の定点中心位置は、監督職員と協議の上、今後事業の評価をする際の基礎データとするため、平成 21 年度に地がきを実施した箇所を定点中心から 25m の範囲に含めることとした。

秋季は日の出 30 分後から調査を開始し、冬季は気温が低いため、鳥類が活発に動き始める時間帯を考慮し、日の出 1 時間後から調査を開始した。

調査地周辺の環境を把握するため、植生を記録し、位置座標をハンディ GPS (写真-1 EMPEX 社製 ポケナビ map21EX) で記録した。



写真-1
ポケナビ map21EX



写真-2 調査状況写真

2.3 調査地点環境概要

表 2-1(1)～(3)に各地点の環境概要を示す。

表 2-1(1) 調査地点環境概要

調査地点名	林小班	GPS 北緯	GPS 東経
⑩(人工植栽主体)	293-ろ	N43° 13' 40.0"	E144° 37' 10.8"
全景写真			
環境概要	人工植栽実施箇所を半径25mの範囲に含むように設定した。周辺には樹高20m程度のトドマツ、ミズナラ、ハルニレ、キハダ、ハリギリなどが疎らに生育する。林床はオオクマザサが優占し、オオヨモギ、エゾノキツネアザミ、エゾイチゴなどが認められる。トドマツ立枯被害跡地であり、日当たりが良く、開放環境となっている。		
調査地点名	林小班	GPS 北緯	GPS 東経
⑪(人工植栽主体)	293-ろ	N43° 13' 33.8"	144° 37' 17.6"
全景写真			
環境概要	人工植栽実施箇所を半径25mの範囲に含むように設定した。周辺にはトドマツ、ミズナラの枯損木やキハダ、ヤチダモ、ミズナラなどが疎らに生育する。林床はオオクマザサが優占し、オオヨモギ、エゾイチゴ、イワノガリヤスなどが認められる。トドマツ立枯箇所であり、日当たりが良く、開放環境となっている。		

表 2-1 (2) 調査地点環境概要

調査地点名	林小班	GPS 北緯	GPS 東経
⑫(天然更新主体)	293-ろ	43° 13' 19.00"	144° 37' 20.5"
全景写真			
環境概要	地がき実施箇所の範囲を含むように設定した。周辺には樹高15m程度のミズナラ、ヤチダモ、ハリギリなどが疎らに生育する。林床はオオクマザサが優占し、オオヨモギ、ヨブスマソウ、エゾイチゴ、オオアワダチソウなどが認められる。日当たりが良く、開放環境となっている。		
調査地点名	林小班	GPS 北緯	GPS 東経
⑬(天然更新主体)	293-ろ	43° 13' 08.58"	144° 37' 24.8"
全景写真			
環境概要	地がき実施箇所の範囲を含むように設定した。早朝は日陰部分が多い。周辺には樹高15m程度のハルニレ、ミズナラ、ケヤマハンノキが疎らに生育する。林床植生は、オオクマザサが優占し、オオヨモギ、オオアワダチソウなどが認められる。日当たりが良く、開放環境となっている。		

表 2-1 (3) 調査地点環境概要

調査地点名	林小班	GPS 北緯	GPS 東経
天然林 (目標とする天然林)	293-ろ	43° 12' 48.2"	144° 37' 14.9"
全景写真			
環境概要	雷別支線林道付近に設定した。胸高直径30cm程度で樹高15～18m程度のミズナラ、ハルニレ、ケヤマハンノキ、シラカンバ等が茂り、樹冠が連続した広葉樹林である。林床植生はオオクマザサが優占しエゾイラクサ等が認められる。周辺には針葉樹植栽地が近接している。早朝は日当たりが悪い。		

3. 調査結果

3.1 調査日時及び天候

表 3-1 に各地点の調査日時と天候を示す。

表 3-1 調査日時・天候

秋季調査		日の出 5:30	調査時間 6:00～8:00		
調査地点	調査日	天候	気温(℃)	風力	
⑩	10月13日	晴	4.6～8.7	微風	
⑪	10月12日	晴	0.6～5.7	微風～弱風	
⑫	10月12日	晴	1.0～6.3	微風	
⑬	10月11日	晴	6.5～10.1	微風	
天然林	10月11日	晴	6.2～10.0	無風～微風	

冬季調査		日の出 6:45	調査時間 7:45～9:45		
調査地点	調査日	天候	気温(℃)	風力	
⑩	12月14日	晴	-10.1～-5.6	無風～微風	
⑪	12月13日	晴	-8.2～-3.4	微風	
⑫	12月13日	晴	-8.0～-4.6	弱風	
⑬	12月14日	晴	-9.1～-5.0	微風	
天然林	12月12日	晴	-10.2～-4.9	微風	

3.2 確認鳥類

調査の結果、2回の調査において、5目18科37種の鳥類を確認した。

目別の確認種数としては、スズメ目24種、タカ目6種、キツツキ目4種、ハト目2種、カモ目1種の順に多い結果となった。

調査時期は10月の渡り時期と12月の越冬期の2回実施したため、北海道では主に夏鳥として確認される、チゴハヤブサ、キジバト、アオバト、モズ、アカハラ、マミチャジナイ、ウグイス、アオジ、ベニマシコ、留鳥として確認される、トビ、カラ類、ハシブトガラス、ハシボソガラス、冬鳥として確認されるオオハクチョウ、オオワシ、ツグミ、ワタリガラス等を確認した。

10月及び12月調査を比較すると、10月調査時は30種、12月調査時は24種を確認した。

このうち指定等鳥類はオジロワシ、オオワシ、オオタカ、ハイタカ、クマゲラの5種を確認した。

当該地区周辺は針葉樹人工林及び広葉樹二次林でほとんどが占められる環境のため、当該地区の環境を反映した森林性の種が大部分を占める結果となった。

表 3-2 に確認鳥類の一覧を示し、表 3-3 に月別の確認鳥類を示す。

表 3-2 確認鳥類一覧表

目	科	種名	学名	渡来区分	主な生息環境
カモ	カモ	オオハクチョウ	<i>Cygnus cygnus</i>	冬鳥・旅鳥	河川・湖沼
タカ	タカ	トビ	<i>Milvus migrans</i>	周年	森林・草原・市街地・河川・湖沼・海
		オジロワシ	<i>Haliaeetus albicilla</i>	周年・冬鳥	海・河川・湖沼
		オオワシ	<i>Haliaeetus pelagicus</i>	冬鳥	海・河川・湖沼
		オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>	周年	森林・草原
		ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i>	周年	森林
	ハヤブサ	チゴハヤブサ	<i>Falco subbuteo</i>	夏鳥	農耕地・市街地
ハト	ハト	キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	夏鳥	森林・草原・市
		アオバト	<i>Sphenurus sieboldii</i>	夏鳥	森林
キツツキ	キツツキ	ヤマゲラ	<i>Picus canus Gmelin</i>	周年	森林
		クマゲラ	<i>Dryocopus martius</i>	周年	森林
		アカゲラ	<i>Dendrocopos major</i>	周年	森林
		コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>	周年	森林
スズメ	ヒヨドリ	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	周年	森林・市街地
	モズ	モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	夏鳥	農耕地・草原
	ミソサザイ	ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i>	周年	森林
	ツグミ	アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i>	夏鳥	森林
		マミチャジナイ	<i>Turdus obscurus</i>	旅鳥	森林
		ツグミ	<i>Turdus naumanni</i>	冬鳥・旅鳥	森林・市街地
	ウグイス	ウグイス	<i>Cettia diphone</i>	夏鳥	森林
	エナガ	エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>	周年	森林
	シジュウカラ	ハシブトガラ	<i>Parus palustris</i>	周年	森林
		ヒガラ	<i>Parus ater</i>	周年	森林
		シジュウカラ	<i>Parus major</i>	周年	森林・市街地
	ゴジュウカラ	ゴジュウカラ	<i>Sitta europaea</i>	周年	森林
	キバシリ	キバシリ	<i>Certhia familiaris</i>	周年	森林
	ホオジロ	アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>	夏鳥	森林・草原
	アトリ	カワラヒワ	<i>Carduelis sinica</i>	夏鳥・一部越冬	森林・草原・市
		マヒワ	<i>Carduelis spinus</i>	周年	森林
		ベニマシコ	<i>Uragus sibiricus</i>	夏鳥・一部越冬	森林・草原
		ウソ	<i>Pyrrhula pyrrhula</i>	周年	森林
		シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>	夏鳥・一部越冬	森林
	ムクドリ	ムクドリ	<i>Sturnus cineraceus</i>	周年・一部夏鳥	森林・市街地
	カラス	カケス	<i>Garrulus glandarius</i>	周年	森林
		ハシボソガラス	<i>Corvus corone Linnaeus</i>	周年	草原・市街地・河川・湖沼・海
		ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	周年	森林・草原・市街地・河川・湖沼・海
		ワタリガラス	<i>Corvus corax Linnaeus</i>	冬鳥	海岸・沿岸森林
5目	18科	37種			

注1) 種の配列・和名は「日本鳥類目録 改訂第6版(日本鳥学会、2000年)に基づく。

注2) 時期および主な生息環境は「北海道野鳥図鑑 2003年 亜璃西社」を参考とした。

渡来区分はその種が生息する主要な時期を以下に示す用語で示した。

周年: 年間を通して見られるもの。(留鳥)

夏鳥: 春季から夏季の繁殖期に渡来するもの。

冬鳥: 秋季から冬季に渡来し越冬するもの。

旅鳥: 春秋に道内を通過するもの。

表 3-3 月別確認鳥類一覧表

目	科	種名	10月調査	12月調査
カモ	カモ	オオハクチョウ	●	●
タカ	タカ	トビ		●
		オジロワシ		●
		オオワシ		●
		オオタカ	●	
		ハイタカ	●	
	ハヤブサ	チゴハヤブサ	●	
ハト	ハト	キジバト	●	
		アオバト	●	
キツツキ	キツツキ	ヤマゲラ	●	●
		クマゲラ	●	●
		アカゲラ	●	●
		ユゲラ	●	●
スズメ	ヒヨドリ	ヒヨドリ	●	●
	モズ	モズ	●	
	ミソサザイ	ミソサザイ	●	
	ツグミ	アカハラ	●	
		マミチャジナイ	●	
		ツグミ		●
	ウグイス	ウグイス	●	
	エナガ	エナガ	●	●
	シジュウカ	ハシブトガラ	●	●
		ヒガラ	●	●
		シジュウカラ	●	●
	ゴジュウカ	ゴジュウカラ	●	●
	キバシリ	キバシリ	●	●
	ホオジロ	アオジ	●	
	アトリ	カワラヒワ	●	●
		マヒワ		●
		ベニマシコ	●	
		ウソ		●
		シメ	●	●
	ムクドリ	ムクドリ	●	
	カラス	カケス	●	●
		ハシボソガラス	●	●
		ハシブトガラス	●	●
		ワタリガラス		●
5目	18科	37種	5目18科30種	4目11科24種

3.3 定点半径 25m 圏内の出現種数及び個体数

定点半径 25m の圏内で確認された鳥類は、4 目 16 科 30 種であり、出現種数を比較すると、最も多くの種が確認されたのは調査地⑫の 10 月で 15 種、次いで調査地⑩と天然林の 10 月調査時の 13 種であり、最も少なかったのは、調査地⑬の 10 月調査時の 5 種であった。

確認個体数に関しては、調査時間中における、のべ個体数であり、同一個体を複数回記録している可能性があるため、比較の対象とはしない。

下記の表 3-4 に定点半径 25m の圏内で確認された鳥類を示す。

表 3-4 定点半径 25m 圏内で確認された鳥類一覧表

4目	16科	30種	調査地点・調査月									
			⑩		⑪		⑫		⑬		天然林	
目名	科名	種名	10月	12月	10月	12月	10月	12月	10月	12月	10月	12月
タカ	タカ	トビ		1		3		2		16		
		ハイタカ					1					
		ハヤブサ					1					
ハト	ハト	キジバト			3							
		アオバト	1		2							
キツツキ	キツツキ	ヤマゲラ		2			1		1			
		クマゲラ					2				1	
		アカゲラ	1		2							1
		コゲラ					4	1	1		1	
スズメ	ヒヨドリ	ヒヨドリ		2		1	5				3	4
	ミソサザイ	ミソサザイ										
	ツグミ	アカハラ	3				3				4	
		マミチャジナイ									1	
		ツグミ		14								
	ウグイス	ウグイス					1					
	エナガ	エナガ	5		11		6			7		
	シジュウカラ	ハシブトガラ	14	5	1	1	6	3	13	5	13	4
		ヒガラ	7		3	3	7	3		6	4	2
		シジュウカラ	12	2	1		3				3	3
	ゴジュウカラ	ゴジュウカラ	3	3			5	2	5	3	16	
	キバシリ	キバシリ									1	
	ホオジロ	アオジ	2		3		10		9		1	
	アトリ	カワラヒワ	6			8					4	
		ウソ						3				
		シメ				6						
	ムクドリ	ムクドリ	2									
	カラス	カケス	3					2		1		
		ハシボソガラス			24			6		9	4	2
		ハシブトガラス	9	10	4	9	7	3		2		
		ワタリガラス				2						
個体数合計			68	39	54	33	62	25	29	49	56	16
種数合計			13	8	10	8	15	9	5	8	13	6

※表中の明朝体数字は個体数を示し、ゴシック体数字は出現種数を示す。

3.4 定点半径 25m 圏内における確認状況別出現種数

各月の調査結果を以下に示す。

3.4.1 10 月調査結果

各調査地点における出現種数に差が見られた。各調査地点における主な行動内容は、調査地⑩～⑬は樹上留りと上空通過が多い傾向にある。天然林は樹上留り、索餌が多い。以下に地点毎について述べる。

調査地点⑩

索餌・樹上留り・上空通過が 6～8 種と行動内容に大きな差は無い。

調査地点⑪

5 地点中上空通過が最も多い。樹上留りに対し索餌が半数となった。

調査地点⑫

索餌・樹上留り・上空通過が 7～10 種と確認状況は様々である。藪内外は 2 種となった。

調査地点⑬

他の地点と比較し出現種数が少ないことから、各確認状況も少ない。
樹上留りに対して索餌が多い。

調査地点天然林

5 地点中樹上留りに対して索餌が最も多い。出現種数に対して上空通過が少ない。

下記の表 3-5 と図 3-1 に結果を示す

表 3-5 10 月 25m圏内確認状況別出現種数

10月圏内行動別種数					出現種数	森林再生方法	立木密度
調査地	藪内外	索餌	樹上留り	上空通過			
⑩	1	6	8	7	13	人工植栽主体	疎
⑪	1	3	6	9	10	人工植栽主体	疎
⑫	2	7	10	8	15	天然更新主体	疎
⑬	1	3	4	2	5	天然更新主体	疎
天	1	8	10	2	13	-	中

※1種につき複数の行動を取るため上記の表の種数は出現種数とは異なる。

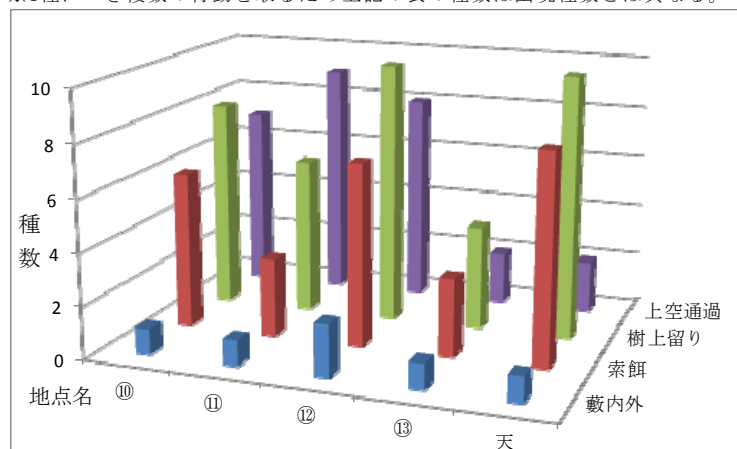


図 3-1 10 月 25m圏内確認状況別出現種数

3.4.2 12月調査結果

各調査地点における出現種数に大きな差は無い。各調査地点における主な行動内容は上空通過が多い傾向にある。以下に地点毎の確認状況について述べる。

調査地点⑩

索餌・樹上留り・上空通過が3～5種と行動内容に大きな差は無い。

調査地点⑪

出現種数の全てで上空通過が見られる。

調査地点⑫

5地点中最も出現種数が多い9種となり、出現種の全てで上空通過が見られる。

調査地点⑬

索餌・樹上留り・上空通過が4～6種と確認状況に大きな差は無い。

調査地点天然林

他の地点と比較し各確認状況が少ない理由として、出現種数の少ない事が挙げられる。樹上留りと索餌が同数である。

下記の表3-6と図3-2に結果を示す。

表3-6 12月 25m圏内確認状況別出現種数

調査地	12月圏内行動別種数				出現種数	森林再生方法	立木密度
	藪内外	索餌	樹上留り	上空通過			
⑩	0	4	5	3	8	人工植栽主体	疎
⑪	0	2	3	8	8	人工植栽主体	疎
⑫	0	4	5	9	9	天然更新主体	疎
⑬	0	4	4	6	8	天然更新主体	疎
天	0	2	2	4	6	-	中

※1種につき複数の行動を取るため上記の表の種数は出現種数とは異なる。

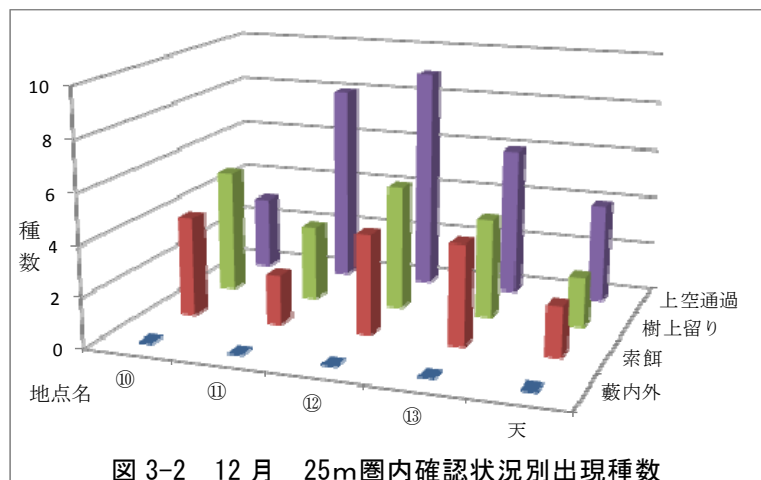


図3-2 12月 25m圏内確認状況別出現種数

3.5 定点半径 25m 圏外の出現種数及び個体数

定点半径 25mの圏外で確認された鳥類は、5 目 16 科 34 種であった。

定点半径 25mの圏外では、地点毎に見通し距離が異なるため、確認状況別種数の比較は難しいが、調査地⑪の種数に関して、他の地点とは異なる傾向が確認された。なお、個体数に関しては、調査時間中における、のべ個体数であり、同一個体を複数回記録している可能性があるため、比較の対象とはしない。

調査地⑩、⑫、⑬、天然林の 4 地点において、各地点で 10 月と 12 月の種数を比較すると、その差は 1～3 種になり調査時期による大きな差は無かった。

調査地⑪において、10 月と 12 月の種数を比較すると、10 月に 18 種であったが 12 月に 9 種と半減した。

下記の表 3-7 に結果を示す。

表 3-7 定点半径 25m圏外で確認された鳥類一覧表

5目	16科	34種	調査地点・調査月										
			⑩		⑪		⑫		⑬		天然林		
目	科	種名	10月	12月	10月	12月	10月	12月	10月	12月	10月	12月	
カモ	カモ	オオハクチョウ				5	4	5					
タカ	タカ	トビ		5						19			
		オジロワシ		1						1			
		オオワシ		1				1					
		オオタカ							1				
ハト	ハト	キジバト			5		1						
		アオバト										2	
キツツキ	キツツキ	ヤマゲラ	1				1		1	2	1		
		クマゲラ		1	1				1	1			
		アカゲラ		1	1		1	1	2			1	
		コゲラ				1			1	1	1	1	
スズメ	ヒヨドリ	ヒヨドリ	1		1	3	1	5		3	1	3	
	モズ	モズ	1		2								
	ミソサザイ	ミソサザイ	1										
	ツグミ	アカハラ			2		1		1				
		マミチャジナイ			3								
		ツグミ								4			
	ウグイス	ウグイス			1						1		
	エナガ	エナガ			4	2						3	
	シジュウカラ	ハシブトガラ		3	1	2	1	3	1			10	
		ヒガラ		2			1	1			3	1	
		シジュウカラ			1		1		2		2		
	ゴジュウカラ	ゴジュウカラ	1	1	1	1	1				1	3	
	キバシリ	キバシリ				1			2			1	
	アトリ	カワラヒワ			15								1
		マヒワ							3				
		ペニマシコ	1		1					1			
		ウソ				1					2		
		シメ	1	3	4	1				2			
	ムクドリ	ムクドリ											
	カラス	カケス		1	1			1	1	2	1	2	
		ハシボソガラス			2				2	8			5
		ハシブトガラス			3			1	1		1	4	3
		ワタリガラス							2				
個体数合計			7	19	49	17	15	23	25	35	18	32	
種数合計			7	10	18	9	12	11	13	10	10	11	

※表中の明朝体数字は個体数を示し、ゴシック体数字は出現種数を示す。

3.6 指定等鳥類の確認状況

調査の結果、指定等鳥類としてオジロワシ、オオワシ、オオタカ、ハイタカ、クマゲラの5種を確認した。このうち定点半径25mの圏内で確認された種は、ハイタカとクマゲラである。

図3-3に確認位置、表3-8に生態及び確認状況を整理した。

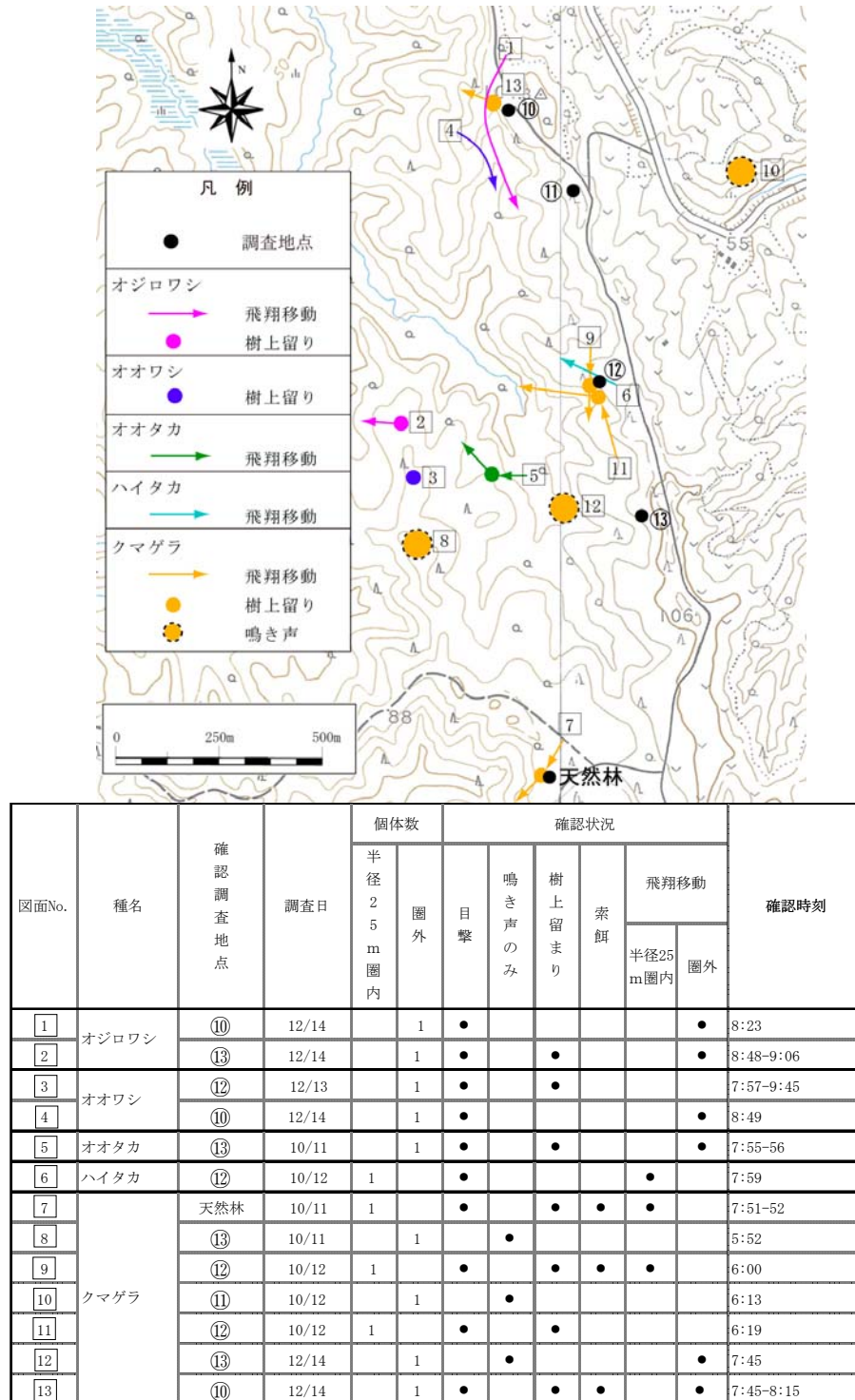


図3-3 指定等鳥類確認位置図

表 3-8 指定等鳥類生態

和名	学名	基準	一般生態	確認状況	写真 (注)
オジロワシ	<i>Haliaeetus albicilla</i>	I / 天然記念物 II / 国内希少野生動植物 III / 絶滅危惧種 IV / 絶滅危惧 I B 類 V / 絶滅危惧 I B 類	北海道では周年または冬鳥である。冬季はロシア極東地域から南下してくる個体が北海道全域で越冬する。冬季は水鳥の多い海岸や不凍水域に出現するほか、サケの遡上する河川にも集まる。近年は狩猟により山中に放置されたエゾシカの死骸を食べに山間部でも見られる。北海道で確認される個体は海岸・大きな河川・湖沼に近い広葉樹林等を営巣地として利用する。魚類を主食とするが、水鳥を捕食したり、哺乳類の死骸を食べることもある。	12月14日に調査地⑩で飛翔移動、調査地⑬で樹上留りを確認した。どちらも25m圏外の確認である。	
オオワシ	<i>Haliaeetus pelagicus</i>	I / 天然記念物 II / 国内希少野生動植物 III / 絶滅危惧種 IV / 絶滅危惧 II 類 V / 絶滅危惧 II 類	北海道では冬鳥である。オジロワシ同様に冬季はロシア極東地域から南下してくる。越冬地は道東に集中し、その他の地域では少数が見られる程度である。冬季は水鳥の多い海岸や不凍水域に出現するほか、サケの遡上する河川にも集まる。近年は狩猟により山中に放置されたエゾシカの死骸を食べるため、山間部でも見られる。	12月13日に調査地⑫で樹上留り、12月14日に飛翔移動を確認。どちらも25m圏外の確認である。	
オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>	II / 国内希少野生動植物 III / 絶滅危急種 IV / 絶滅危惧 II 類 V / 準絶滅危惧	北海道では周年確認される。ただし秋には多くが暖地へ移動し、厳冬期には少なくなる。夏の終わりから秋にかけては移動個体が様々な環境でみられ、秋から冬は海岸草原、湖沼、河川等にも出現する。全道で繁殖し、平地から山地のカラマツ林、農地周辺の広葉樹防風林での営巣が多い。主に小型の鳥類を捕食するほか、エゾリスやエゾキウサギなどを捕える事もある。	10月11日に調査地⑬でハシブトガラスにモビングを受ける成鳥オス1個体を確認。一度トドマツ樹上に留り、その後飛翔移動。25m圏外の確認である。	
ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i>	III / 絶滅危急種 IV / 準絶滅危惧 V / 準絶滅危惧	北海道では周年確認される。ただし秋には多くが南方へ移動する。平地から比較的標高の高い山地までの針交混交林に生息し、カラマツやトドマツ等の針葉樹に営巣する。樹間の比較的混みいった林で繁殖する傾向にある。小型の鳥類を主食とし、ネズミなどの小型哺乳類も捕食する。	10月12日に調査地⑫で25m圏内を飛翔移動するメス1個体を確認。	
クマゲラ	<i>Dryocopus martius</i>	I / 天然記念物 III / 絶滅危惧種 IV / 絶滅危惧 II 類 V / 絶滅危惧 II 類	北海道と東北北部では周年確認される。全道に生息する。都市部や湿原部を除く大木のある広い森林に生息し、高山には少ない。主に樹木の中に巣を作るアリ類を捕食するため、楕円形の穴を幹に穿つ。大木に穴を穿って巣を作り、繁殖期は3月～8月、産卵は5月中旬、巣立ちは6月中旬～下旬。非繁殖期は繁殖地を離れ、番いは単独で行動する。	10月調査では調査地⑩以外の全てで確認があり、天然林、調査地⑫では25m圏内の確認である。12月調査でも調査地⑩、⑬で確認した。	

I 文化財保護法 (昭和25年 法律214号)

II 絶滅のおそれのある野生動植物種の保存に関する法律 (平成4年6月5日 法律第75号)

III 北海道の希少野生動物 (北海道レッドデータブック 2001)

IV 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブック (環境省 2002)

V レッドリスト (環境省 2006)

(注) 日本の鳥550 山野の鳥 (文一総合出版 2000年) より転写。

4. 調査結果まとめ

4.1 鳥類相

- ・調査の結果、10月、12月の出現鳥類の合計種数は、5目18科37種であった。
- ・10月は秋の渡り期、12月は越冬期である事から、一部の夏鳥と留鳥、冬鳥までの幅広い鳥類相が確認された。
- ・確認した種は当該地区の環境を反映し、主要な生息環境を森林とする種が多くを占めた。
- ・確認した鳥類のうち、指定等鳥類に該当する種は、オジロワシ、オオワシ、オオタカ、ハイタカ、クマゲラの2目2科5種となった。

4.2 確認状況

- ・非繁殖期である時期の調査であったため、求愛行動、交尾、縄張り主張、巣材運び・餌運び等の確認は無かった。このうち求愛行動や、縄張り主張にあたる囀りが無い事から、目撃や地鳴きによる確認となった。
- ・観察中に確認した個体数は、のべ個体数であり、同一個体を複数回記録している可能性がある。
- ・藪内外での確認が極端に少ない要因として、調査時期が秋季および冬季のため、夏鳥として渡来し藪を好んで利用する、アオジ、ウグイス類等の確認が少なかったことがあげられる。
- ・調査地⑩～⑬の4地点の周辺は、疎林であるため目撃による出現種の確認が容易である事から、樹上留り・上空飛翔の確認が多い。
- ・天然林における10月調査では枝葉による視界の障害があったことから、上空通過の確認が少なく、12月の落葉後は上空が見やすくなるため、出現種数に対する上空通過が多くなったものと考えられる。
- ・秋季および冬季における調査では、種組成に違いはあるものの秋季30種、冬季24種であり、出現種数に大きな差は認められない。

5. 考察

今後の調査で留意すべき事項

5.1 調査時期

10月・12月は、秋季の渡り時期～越冬期にあたり、繁殖テリトリーを形成しない時期であることから、一定の箇所に着せず、行動圏が広がる可能性がある。また、植生及び餌としての昆虫類等が休眠期に入ることから、春季および夏季の繁殖期とは、行動圏、行動内容が異なると思われる。このため、今年度確認された出現種数・個体数を過年度に実施された6月調査結果と比較するのは難しい。

今後は過年度調査の6月よりも早い時期を含む春季～冬季における調査を実施する事により、過年度調査結果との比較および、四季にわたる出現種・個体数を把握できるものとする。

5.2 調査方法

行動内容の記録については、どこで何(植物や虫等)を索餌しているのか、縄張り主張があるのか等の詳細を記録する事により、事業地に対する依存度を評価できる可能性があると考えられる。

今後は本調査と同様の定点位置、調査範囲で、調査を継続する事により、現在枯損被害を受けた事業実施地点における林況変遷に伴う鳥類相を把握できると考えられる。